山口県史だより

第31号／平成26年11月

特集　100年前の古建築修理　瑠璃光寺五重塔の解体修理

防長教育

第貳百貳號

修理工事成完したる
瑠璃光寺五重塔婆

（巻中雜錄欄參照）

（山口廰生寫眞館撮影）

明治三十六年四月廿一日遞信省第三種郵便物認可
大正五年九月一日發行（毎月壹回一日發行）

山口縣教育會

『防長教育』第202号表紙
（山口県教育会機関誌＜大正5年9月発行＞山口県立山口図書館蔵）
瑠璃光寺五重塔解体修理の完了を伝える。同誌「余録」のコーナーに修理内容が詳細に記されている。

特集

一〇〇年前の古建築修理　瑠璃光寺五重塔の解体修理

大内文化の香り漂う名建築「瑠璃光寺五重塔」。梅・桜・新緑・紅葉・雪化粧・月あかり・星影・朝もや……。周囲の光景とともに奏でられる四季おりおりの豊かな表情は、訪れる人々をおだやかにもてなしてくれます。

今回の特集では、今からほぼ百年前、大正四年（一九一五）から翌年にかけて実施された五重塔の解体修理にまつわるエピソードをとりあげて、近代の文化財建造物保護の一場面を紹介してみたいと思います。

■特別保護建造物指定を受ける

瑠璃光寺五重塔は、奈良法隆寺・京都醍醐寺の塔とともに日本三名塔に数えられます。大内義弘の菩提を弔うために弟大内盛見により香積寺境内であった現在地に建立されました。香積寺は江戸初期に萩に移築されますが、当時の山口町民のたっての願いにより、五重塔は萩への移築を免れ、瑠璃光寺の塔としてその姿を山口の地にとどめることになりました。そして毛利家の庇護のもと、万治・貞享・享保・寛延・安永・安政年間に屋根葺き替えなどの修理が行われ、その情趣あふれるたたずまいは守られ続けてきたのです。

明治三十年（一八九七）に「古社寺保存法」が制定されると、わが国の歴史の証徴として、各地の古社寺建築にも保護の目が向けられはじめます。瑠璃光寺五重塔も、明治三十六年に、県内では住吉神社本殿・功山寺仏殿とともに「特別保護建造物」（現在の国宝・重要文化財に相当）に指定され、国による文化財保護の枠組みの中に位置づけられることになりました。

■根本修理への序章

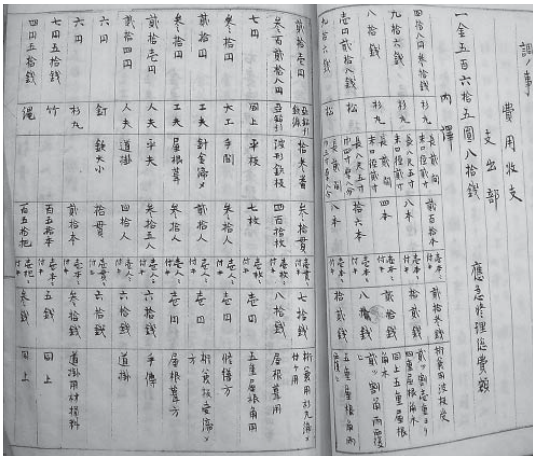
明治十年代、毛利家からの支援や県会議員平川要らの奔走により塔は修理されましたが、明治三十年代には、屋根の損傷が激しく、一刻も早い治療が必要な状況にありました。

明治四十一年、古社寺修復の専門家として関野貞と塚本慶尚が山口の地を訪れます。東京帝国大学教授であった関野は平城宮址の発見者としてその名を知られていますが、「内務省古社寺保存計画嘱託」などの立場で全国の古社寺修理のプランナーとしての役割を果たしていた建築史家です。塚本は関野の指導のもと、各地の古社寺修理の陣頭指揮にあたっていた建築技師であり、この時期、下関住吉神社の修理に関与していました。関野と塚本の登場は、破損状況の精査に基づいた修理設計が策定されることを意味しており、いよいよ本格修理への第一歩が踏み出されることになったのです。しかし、修復技術者の配置、費用の工面など、事前準備に時間を要することから、まずは応急的に雨漏りを防ぐ手立てが講じられることになりました。

明治末期の瑠璃光寺五重塔
（右側）明治41年の「行啓記念」で山口育児院が発行した絵はがき（萩市明木図書館蔵）
（左側）亀山山頂から瑠璃光寺五重塔を臨む。大正の本格修理前の屋根の破損状況を観察できる。
（写真師麻生雲煙撮影＜山口県文書館「毛利家文庫」＞）

■トタンで覆われてしまった五重塔

明治四十一年の「応急修理」の工事見積書で注目されるのが「亜鉛引」「波形鉄板」の文字です。新聞でも、「大破」「雨水漏洩防」「亜鉛板にて屋根を葺きおる始末なる」、さらには「当地の一名勝も見る影もなき惨状を呈する」と報じられています。雨漏りを防ぐためとは言え、トタンに覆われてしまった由緒ある古建築を目の当たりにした人々の落胆ぶりが伝わってきます。トタン被覆は建物の通気をさえぎってしまうので、建築部材の蒸れ腐れをひきおこします。木造建築にとっては好ましい状態ではありませんので、根本修理の実現が急がれることになります。当時、下関住吉神社の修理工事にあたっていた建築技師吉森敏重に、経費の試算や設計の詳細についての相談がもちかけられています。



仮修理の見積書
（「寺院仏堂　明治 41 年」< 山口県文書館「県庁文書」>）

■大正の根本修理

大正三年六月の暴風雨で五重塔はいっそう大きなダメージを負ってしまいます。内務省への報告には「酷度破損」「屋根垂木露出」「亜鉛葺……吹キ剝ギ」とあります。五重塔はいよいよ本格的な修理の時を迎えることになりました。

大正四年一月、塚本慶尚が山口県から「瑠璃光寺五重塔修理工事監督」に任命されます。塚本の指揮下、全国各地で修復の実務にあたっていた吉森敏重と佐藤竹治も棟梁として迎えられ、古建築に精通した専門的な修理チームが結成されます。そして全解体の修理方針のもと、大正四年三月、修復事業はスタートしました。

まず、雨漏りなどによる不具合箇所の把握とその原因究明がすすめられます。損傷の著しい部材は取り替えられることになりますが、古建築の修復では、補強による古材の再用が原則とされます。この時の修理では、取り替え材として高野山の檜が用いられましたが、歴史的な風合いを考慮して、新材は塔の内部や高層に、古材は建物外周や低層に配置されています。

解体修理によって、補修や増築などの変遷が明らかにされるほか、部材や木組の検証により、創建時の建築技法が解明されます。また、解体を経てその後に建物を組み上げることになるので、「ゆるみ」や「ゆがみ」などの経年劣化が矯正されることにもなります。木造建築の解体修理は、建築技術の継承と文化遺産の未来に向けた伝承の舞台でもあるのです。

■建築年代推定のてがかり

大正の解体修理では大きな発見がありました。斗組の部材から「嘉吉二年二月六日」と記された墨書が確認されたのです。それまで寺伝によって室町時代応永年間とされてきた五重塔の建築時期が、この墨書により嘉吉二年（一四四二）に限定されることになったのです。

■古建築へのまなざし

大正五年七月、瑠璃光寺への引き渡しが終わり、五重塔の修理事業の幕がおろされました。トタンに覆われていた屋根も檜皮葺きに復原され、新聞報道で「輪奐壮麗」のフレーズで飾られた修復後の五重塔は、「山口の風景上欠ぐべからざるもの」としての日常を再び迎えることになったのです。

古建築を見つめながらたしなむ心おだやかなひととき。長寿の世の中に身を置く現代人にとって大切な瞬間なのかもしれません。

（淺川）

大正修理後の絵はがき
（山口県文書館「雨村家文書」）

近世部会

筑前の海人

昨年前半のＮＨＫの朝ドラは、岩手県の三陸海岸を舞台にした『あまちゃん』でした。『あまちゃん』は、「海女さん」と「甘ちゃん（甘えん坊）」をかけたタイトルとのこと。主人公が挑んだ潜水漁は全国各地で行われていますが、山口県では向津具半島の大浦を中心に、現在も続けられています。東日本大震災の年、向津具には関西方面の水産業者が、アワビやサザエなどの買い付けに来ていたそうです。

近世においては、筑前の鐘崎（現福岡県宗像市）を中心に、大島（同）や藍島（現北九州市）など玄界灘・響灘に面した地域の海人が、宇生（旧田万川町）、須佐、宇田、木与、大井、奈古、萩、通、三隅、仙崎、黄波戸、大浦、島戸、角島、矢玉、湯玉、厚島、室津、蓋井島等々に入漁していました（伊藤彰「鐘崎海人の移動」『えとのす　第2号』、一九七五年）。筑前の海人は、熨斗（のし）等をつくる加工技術に優れ、各地に活動の場所を抱えていました。

左の写真は、角島で亡くなった筑前・大島の海人の墓です。この周辺には、海人のものと推定される自然石でつくられた墓がたくさんあります。異郷で活動した海人たちの力強さが伝わってくるようでした。

（担当　河本・宮﨑・小田）

筑前海人の墓

明治維新部会

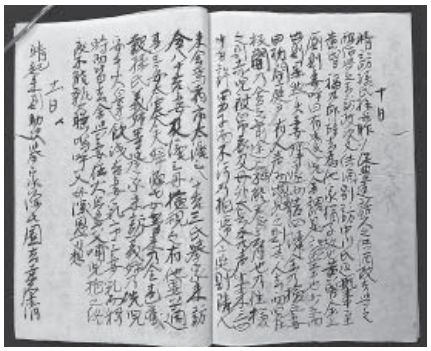
維新期に生きた人々の地域力

想像してみてください。ある日突然、身寄りのない赤ちゃんを育てなければならなくなったとします。通信手段は限られています。あなたならどうしますか。今から約百四十年前の豊浦郡宇賀本郷（現下関市）の人々は、この難問を村人総出で解決しています。村医者をしていた古谷道庵が、四三年間にわたって医療記事と合わせて書き続けた日記に記されていました。

明治四年（一八七一）十二月十日、生後間もない男児が道庵の家の前に捨てられていました。ところが、翌日には早くも、子を亡くした乳母を見つけます。他にも近隣の女性たちが健康状態を調べたり、体を洗ったり、母乳を与えたり、おむつを縫ったり、まさに寄ってたかって面倒を見ています（『山口県史　史料編　幕末維新7』三九二頁）。

日頃から「共助」のしくみを持つ宇賀の人々は、心理的距離もきわめて近かったようです。私たちは緊急時の切迫した状況の中で、「あそこには生まれたばかりの赤ちゃんがいる」「あの人なら縫い物が上手だ」といった細やかな情報をどれだけ集めることができるでしょうか。道庵の日記は私たちに、地域づくりの意義について改めて問いかけているようです。

（担当　北林・岡松・村里）



「古谷道庵日乗」明治4年12月10日条
（下関市烏山民俗資料館蔵）

古谷道庵宅跡前の道路

近代部会

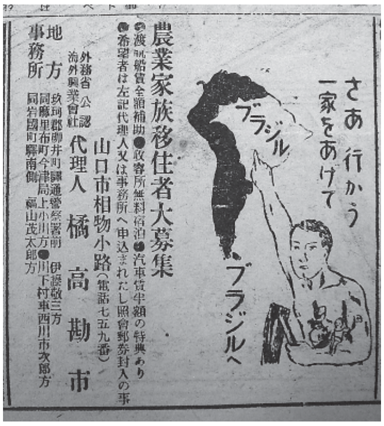
ブラジル移民の募集広告

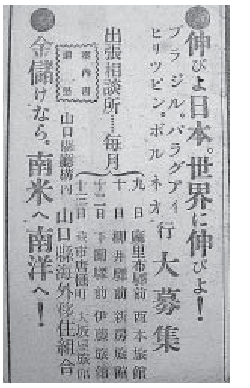
明治四十一年（一九〇八）、「笠戸丸」が神戸を出港して以来続いてきたブラジル移民は、昭和五年（一九三〇）にブラジルで起こった革命と世界恐慌によるコーヒー価格の暴落の影響を受けて激減しました。ブラジルへ渡航する山口県民も、昭和五年から減少しはじめましたが、移民会社による募集は続けられていました。

当時の移民募集の新聞広告には「渡航船賃全額補助」「収容所無料宿泊」「汽車賃半額」といった渡航熱をあおる特典が書かれています。拓務省のブラジル事情講演会にあわせて、移民会社では懇談会も開催しました。こうした活動の結果、応募者は増加していきました。

ところが、排日気運の高まったブラジルで、昭和九年、移民の入国を制限する法律が公布され、日本からの移民は再び減少します。この後も、拓務省と海外興業株式会社だけでなく、県庁や防長海外協会、山口県海外移住組合による講演会や活動写真会、パンフレット配布などとともに、新聞紙上での募集も続けられました。しかし、移民減少の流れは変わらず、昭和十六年の「ぶえのすあいれす丸」が戦前最後の移民船になりました。

（担当　淺川・古屋・木下）





『防長新聞』紙上のブラジル移民募集広告
（山口県立山口図書館蔵）

現代部会

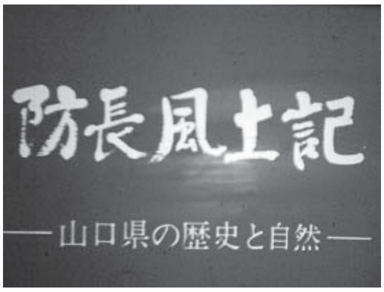
東京で見つけた観光映画「防長風土記」

六月に刊行した『山口県史　史料編　現代4』は、戦後山口県の産業・経済に関わる史料集で、第七章「観光」では、山口県の観光PRを目的に制作された映画「防長風土記」の「作成要領」を掲載しました。これは、映画の企画段階にあたる昭和四十五年（一九七〇）の史料で、山口県文書館に所蔵されています。

山口県が企画したこの映画は、昭和四十六年に読売映画社が製作し、当時の観光映画コンクール最優秀賞に選定されています。映画の原版は、現在、東京国立近代美術館フィルムセンターに所蔵されていますが、どこかで映像の確認ができないかと探していましたら、東京都立多摩図書館に16ミリフィルムが所蔵されていることがわかりました。「東京マガジンバンク」で知られる都立多摩図書館は、雑誌と並び、映像の所蔵に関しても日本有数のライブラリーで、今回は特別に調査に協力していただきました。

遠く離れた東京の地で見つけた当時の山口県の姿は、フィルムの劣化で赤く焼けていましたが、映像が残されてきたことに感謝すると同時に、後世に引き継いでいくことの大切さや難しさを再認識させられました。

（担当　津枝・山本・中野・河村）



「防長風土記」のタイトル映像
（読売映画社<現・株式会社イカロス>、東京都立多摩図書館にて撮影）

東京都立多摩図書館が所蔵する「防長風土記」の16ミリフィルム

県史アラカルト　10

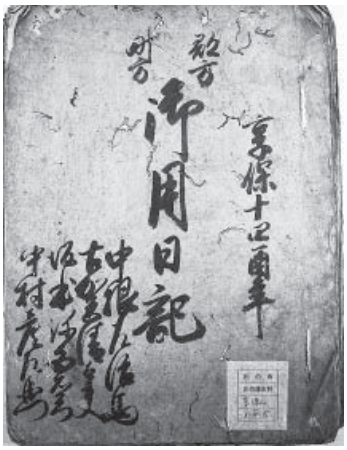
豊後国佐伯藩と近世の防長

今年放送のＮＨＫ大河ドラマは『軍師官兵衛』。中盤の見せ場は「中国大返し」でしょう。備中高松の水攻め、その最中に起きた本能寺の変、信長の死を隠して毛利方との和睦。光秀を討つべく、秀吉軍団の激走。迫力がありました。

和睦の際、秀吉は人質として部下の森高政を差し出しました。この時、輝元が「森」はわが氏と同じだと告げたので、秀吉は高政に毛利を名乗るよう命じました（『寛永諸家系図伝　第十二』続群書類従完成会）。毛利高政は、その後、豊後国佐伯藩主となり、その子孫が廃藩まで治めました。

さて、左の写真は、その佐伯藩の「郡方町方御用日記」です。佐伯城下には「内町」「船頭町」（「両町」と呼ぶ）があり、経済の中心地でした。町方の記録に他国船の入出津記録が出てきます。下の写真は、享保十四年（一七二九）の日記の一部で、「同（正月）廿一日」に「中国岩国」の孫右衛門と市郎兵衛が、それぞれ六枚帆・三人乗、四枚帆・二人乗の船で入津したことが記されています。二艘は「から船」（積荷なし）でしたが、出帆の時からそうだとは考え難く、どこかで積荷を売却したと推定されます。

略地図

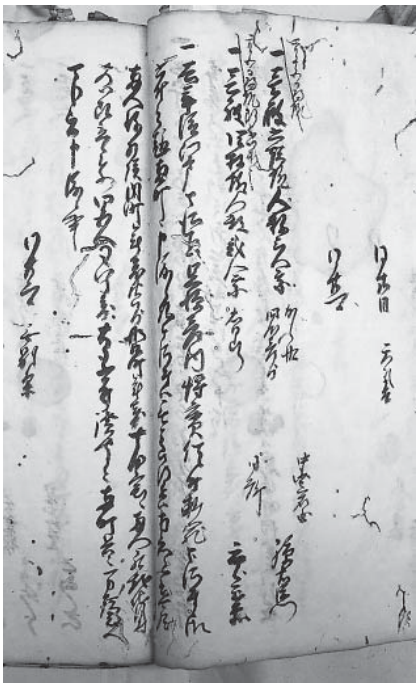

「佐伯藩郡方町方御用日記」
（佐伯市教育委員会蔵）

あるいは、佐伯城下に至るまでに複数の港で売買を繰り返した可能性もあると思われます。この年から三年間を調べたところ、防長両国から入津した船の中心は岩国で、このほか由宇・遠崎・柳井津・上関・室積・下松・妻崎・須恵などの船が、米や木綿などを運んでいました。また紺屋や鏡研ぎなどの職人も出稼ぎに来ていました。

このほか、同藩の「御番頭御用日記」には、他領から魚を求めて佐伯に来た人々のことが記され、「磯魚釣」や「旅小買」「旅魚乞」「旅魚貰」などと区分し、運上を上納させていました。釣・網などの漁業目的よりも、「旅小買」「旅魚乞」などの数が多く、海産物購入のために佐伯を目指す人が多かったようです。そのなかにも、防長両国から渡ってくる人々がいました。周防国を中心に、地名は上記のものと概ね重なっています。

佐伯藩の御用日記は、地元の自治体史等で活用され、右に関連する記述もなされています。このほかの大分県内の自治体史のなかに、近世の防長との交流に関する記述を見い出すことができます。

近世の瀬戸内海の流通は、「天下の台所」と呼ばれた大坂と北国を結ぶ西廻り航路が中心でした。これを木の幹とすれば、様々な方向に枝が伸びていたということができるでしょう。世界は海で繋がっています。周防灘を挟む防長と二豊（豊前・豊後）は、目と鼻の先だったのです。（河本）


享保14年の日記の一部

山口県に世界遺産を

産業遺産国民会議
理事長　八　木　重二郎

私は、現在、富岡製糸場に続く来年の世界遺産として、「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」を認定してもらう活動に力を注いでいる。このプロジェクトは、欧米が一五〇年を要した産業の近代化を、日本は、幕末から明治末までわずか五〇年で成し遂げ、世界の先進産業国家の仲間入りを果たしたわけだが、その基盤となった日本人が長年培ってきた〝ものづくり〟や、教育へのこだわり、そしてその証である産業遺産群は、世界的に見ても充分な価値を有することを広く認識してもらおうというものである。このため、昨年政府の推薦を得て、ユネスコの世界遺産に登録申請したが、具体的には、九州、山口を中心に八県一一市に跨る二三の遺産群が対象となる。

私は今回、これから始まる登録認定に向かっての諸活動に備えるため、防長倶楽部、山口七夕会の仲間を誘って、萩を訪問し、対象となっている遺跡をこの目で確かめることにした。

萩の産業遺産群は、今回の二三の世界遺産候補の中では、最も初期のもので、「萩反射炉」「恵美須ヶ鼻造船所跡」「大板山たたら製鉄遺跡」「萩城下町」「松下村塾」の五つから成り、幕末に西洋技術を取り入れ、何とか産業化を目指そうとした地域社会、長州藩の全体像とその特質を良くあらわしていると実感した。中でも、強い感銘を受けたのが、松下村塾である。

実際に松下村塾の狭い八畳の間に座り、松陰神社の上田宮司から吉田松陰についてお話を伺ったが、あの若さで、わずか一年余りの短期間で、日本の近代化に貢献した多くの人材を育てた吉田松陰という人物の偉大さに改めて感銘を受けた。

来年は、松陰の妹を主人公としたＮＨＫ大河ドラマの放映も予定されている。世界遺産決定と相まって、萩の町や山口県を訪れる人が増え、吉田松陰の偉大さが日本は勿論、世界に認識されるようになることを願いたい。

地域に根ざす・30

須佐郷土史研究会

本会は昭和五十三年（一九七八）会則を定めて正式に発足しました。平成二十三年（二〇一一）に本会の「東京部会」として首都圏在住須佐出身者が地元と相携えて郷土史の研究を進めることになり、大きな組織として発展しました。

会員は地元会員二三名、県外会員一四名で合計三七名です。

この会は「須佐地区を中心とする郷土史の綜合的研究を目的とする」と会則にありますように、須佐の歴史や史跡、文化財、自然や風俗など広い分野で調査研究をし、その成果を保存し、伝承していくことにしています。

近年取り組んでいる事業は、次のようなものです。

（1）古文書を読む会　須佐に残されている古文書を中心に取り上げて解読しその研究を進めています。毎月二回実施。

（2）調査研究として、現在須佐市中細見図（江戸末期作成されたもの）と現在の須佐街との対比を図示化する作業を進めています。本年度中に完成予定です。

（3）須佐と関連のある史跡を探訪（毎年一回）　今まで実施した主な史跡は、益田市中の史跡、旧萩の史跡、益田親施ゆかりの史跡、須佐内の史跡等です。

（4）会誌『温故』の発刊　昭和五十五年から発刊し、今までに二五号発行しています。

（5）歴史講座の開催　須佐に関連のある事柄について、講師を招聘したり、地元講師による講座等を年数回開いています。

（代表　西村　武正）

連絡先　萩市大字須佐四五七〇－一
須佐公民館
電　話　〇八三八七－六－二三一〇

会誌『温故』

県史刊行のお知らせ

◆今年度は、史料編『**近世7**』『**幕末維新7**』『**現代4**』の三巻を刊行し、これまでに三四巻の県史を刊行いたしました。

今後の配本予定巻についてお知らせします。

『**史料編　近代3**』は、大正デモクラシーから第二次世界大戦終結までの時期を対象とし、中央集権的画一化が進行する中での、本県の政治・社会・文化等の史料を収録します。

『**史料編　現代5**』は、第二次世界大戦が終結した昭和二十年（一九四五）から、昭和から平成へと移行する一九九〇年頃までの時期を対象とし、戦後日本の政治・社会の変遷の中で、山口県域の政治・行財政・社会・教育・文化・世相がどのような変貌を遂げてきたのかを明らかにする史料を収録します。

『**通史編　近代**』は、明治四年（一八七一）の廃藩置県から第二次世界大戦終結までの本県の近代史を、多様な歴史的要因に目配りしつつ、幅広い視野から描き出します。

どうぞご期待ください。

こちら県史編さん室

十月十一日、山口市の山口県教育会館を会場に、第二三回山口県史講演会を開催しました。

講師は、山口県史編さん専門委員の勝部眞人先生（広島大学大学院文学研究科教授）で、「今、「ムラ」を考える―山口県の地方改良運動と経済更生運動から見えてくるもの―」と題して講演されました。

江戸時代から存続してきた「ムラ」と呼ばれる地縁社会を、近代の行政はどう扱おうとしたのかという趣旨で、専門的見地から語られた講演は、大変興味深く、参加者からも好評でした。

講演中の勝部眞人先生

山口県史の構成・刊行計画（全41巻）

【通史編】　6巻
- **既刊　原始・古代**
- **既刊　中　　世**
- 近　　世
- 幕末維新
- 近　　代
- 現　　代

【民俗編】　1巻
- **既刊　民　　俗**

【史料・資料編】　33巻
- **既刊　考古1（原始）**
- **既刊　考古2（古代以降）**
- **既刊　古代　（古代史料）**
- **既刊　中世1（記録）**
- **既刊　中世2（県内文書1）**
- **既刊　中世3（県内文書2）**
- **既刊　中世4（県内文書3・県外文書・文学資料）**
- **既刊　近世1（政治1）**
- **既刊　近世2（政治2）**
- **既刊　近世3（経済1）**
- **既刊　近世4（経済2）**
- **既刊　近世5（文化）**
- **既刊　近世6（諸家文書1）**
- **既刊　近世7（諸家文書2）**
- **既刊　幕末維新1（政治・社会1）**
- **既刊　幕末維新2（政治・社会2）**
- **既刊　幕末維新3（政治・社会3）**
- **既刊　幕末維新4（政治・社会4）**
- **既刊　幕末維新5（経済）**
- **既刊　幕末維新6（軍事）**
- **既刊　幕末維新7（文化・海外史料）**
- **既刊　近代1（政治・社会・文化1）**
- **既刊　近代2（政治・社会・文化2）**
- 近代3（政治・社会・文化3）
- **既刊　近代4（産業・経済1）**
- **既刊　近代5（産業・経済2）**
- **既刊　現代1（県民の証言　体験手記編）**
- **既刊　現代2（県民の証言　聞き取り編）**
- **既刊　現代3（言論・文化　プランゲ文庫）**
- **既刊　現代4（産業・経済）**
- 現代5（政治・社会）
- **既刊　民俗1（民俗誌再考）**
- **既刊　民俗2（暮らしと環境）**

【別　編】　1巻
- 年　　表

山口県史だより 第31号

平成26年11月25日発行

編集・発行／山口県県史編さん室

〒753－8501 山口市滝町1番1号

TEL 083－933－4810

FAX 083－933－4869